
司法花子伝

ウェブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

司法花子伝

【Nコード】

N9520B

【作者名】

ウェブ

【あらすじ】

現行司法試験という薄れゆく狭き門かつ、「資格」という性質上避けられないお上の采配。この門の前に今、一人の女性が立ち向かった！

私の名前は司法花子。

旧姓・法務花子。

今年大学を卒業する。

顔もスタイルもごく普通。とりたてて不細工というわけでもないし、美人でもない。

小学生、中学生の頃の成績は中の上、特に問題もなく過ごした。

高校に入ってからそんな自分の中途半端な状態に嫌気がさし、「何かを変えよう」と思いつき、東大を狙う。

勉強の甲斐もあり、何とか現役で合格、その後は法学に進路を取る。

といっても、大学1、2年は目一杯はめを外した。

酒に煙草に男に車、バイトにもおおいに励み、通常の大学生ならば得るものは全て得たと自負している。

そして運命の合コン。

その中に司法太郎がいた。

丸顔で愛嬌はあるが、お世辞にもイケてない。

それでも何回かのデートを重ねる内に、それなりに惹きつけるものは持っていたのかもしれないという事に気づかされた。あくまで「それなりに」だが。

ただ、彼には奇妙な癖があった。

極度に緊張すると言葉の語尾に「ぷー」をつけてしまうのだ。

まるでちびまるこちゃんのあのキャラの如く。

プロポーズの言葉は笑劇的だった。

「ぼ、ぼぼぼ、ぼくと、け、け、け、け、けぷー！！?!」

（この人は一体どこの銀河からやってきたのだろう・・・？）

宇宙人を夫に持つというのも面白い、そう考えてオーケーしてしまった。

こうして私は大学3年にして学生結婚という快挙（怪挙）を成し遂げた。

全てが順調だ。

と思われたのも彼の両親と一緒に生活するまでだった。

そもそも司法家とはかなりの名家らしく、その財力が普通ではない。義母たる司法順子は絵に描いた様な嫌味ったらしい姑であるが、それに反して義父たる司法太一は人間のできた男であると感じられた。

しかし、この男も桁外れ金持ちの例に洩れることなく、どこか抜けている。

それが強く感じられたのはある夕食の席でのことだった。

慣習の如く決められた席に4人が座り、司法家の夕餉は始まる。

「あつはつは。」

「ほほほほ。」

「ぷっぷひゃひゃひゃ！」↑誰も突っ込まない。

奴の「ぷー」癖は極度にリラックスした場合でも起きるらしい。

その日のメインは、鳥のもも肉を香草で蒸したものに奇妙な義母特
性ソースとやらをまぶした、実に奇怪な味のする代物だった。

その怪しげな鶏肉をつついていいる時、義父が私に話を振ってきた。

「いやいや、もうとくに花子さんは気づいていると思うが、太郎
の言葉尻につく奇妙な音・・・」

「素直にぷーぷー言ってるって言えないのかよ・・・」

「ん？」

「いえ、何でもありません。」

「その癖何だが、あれはこいつが小学4年の時だったか、わしが急

に豚の丸焼きを食べたくなつてね。」

「父さんその話はやめてくれぷー。」

（黙れ下郎！）

「いやいや、花子さんには知る権利があると思うよ。で、だ。わたしは豚を一頭我が家に注文した。」

「ちょ、ちよつとトイレに行くぷー・・・」

（去れ下郎！）

「太郎さん大丈夫？」

慌てて義母が後を追う。

その場には私と義父が残された。

「まあ、太郎にとってはトラウマみたいなものなのかもしれん。」

「続けてください。」

「あ、うむ。そしてまあ、何とも美味そうに肥えた豚が一頭その庭に届けられたのだ。しかし・・・」

「・・・」

「わしは豚の丸焼きの正しい作り方何ぞ知らんてね。正しい焼き方があるのやもしれんが、とにかくその時は長い鉄製の竿を用意して・

」

き、きた！

あのぷー太郎の根源に関わる謎の核心にきた！

「・・・そして、豚の尻穴にぶっさした。」

これは傍目にはかなり残虐な光景に映るかもしれないが、あのぷー太郎と結びつけると笑い話にしかない。

「その時豚がぷーぷーぷー泣いてね。それからだ。それを見ていた太郎に変化が起きたのは。」

澄ました顔で鶏肉を口に運んでいたが、内心は氓ウえきれない笑いとほんの少しの憐憫で一杯だった。

「しかしそんな変化にも太郎の人徳だろうか、奴の周りにはいい友達が多くてね。」

「はあ。」

「何と言ったか・・・そうそう、わかお君！わかお君という少年がそれは太郎によくしてくれたもんだよ。」

「・・・」

「あれは小学6年のハロウィンか、彼が太郎と数人の友達と一緒に我が家に来てね。」

(さあどうくる?)

こと、ぷー太郎関係の話だけに期待が高まる。

「何と言ったつけ、ほれ、玄関先で言う・・・」

「トリック・オア・トリート?」

「そうそれだ。親切にも彼は日本語に訳してくれた。」

「・・・」

「太郎にいたずらされたくなければ札をよこせ。」いやはや、あの時のわかお君の顔は本当に鬼のようだね。」

それは行事ではなくかつあげだろう!

「今でも来るんだ、わかお君は。ハロウィンでもないのにね。あっはっは。」

それは恐喝だろう!

どこまで抜けてるんだこのじじい!

「さて、食事が終わったら少し太郎の様子を見てきてくれませんか?もういつまでも母親に頼りきりというのではいかなだろう。」

「いや、私に頼られても困ります。わかお君にお願いしてください。」

とはさすがに言えなかった。

部屋に戻ると例のトラウマ豚が沈痛な面持ちで椅子に腰掛けていた。

「あれは僕にとっては痛い思い出なんだぶー・・・」

「そう。」

だめだ、笑いそうになる。

「でも・・・」

「？」

「誰かと同じ思いを共有できれば、その傷も段々と癒えてくる気がするんだぶー・・・。」

「・・・」

「だ、だから、これからは花子のことを花ぶーと呼ば」

スパンキーン!!

「ぶひゃらぶーっ! い、痛いぶー! いきなり頬をはたくなんて・・・、亭主になにするぶひーっ!」

返す刀で左をはたく。

「も、もう我慢できないぶー!」

「それはこちらのセリフだ。今日限り別居させていただき、時期をもって離婚という形で決着をつけさせていただきます。」

「そそそ、そんなこと・・・」

うなる豚を尻目に、必要最低限の荷物を持って私は司法家を飛び出した。

それから都心で安いアパートを見つけそこに居を構え、アルバイトをしながら生計をたてた。

もちろん大学にも籍は置いたままなので、そこから通学することになる。

幸いにも両親は何も言わなかった。

司法家の方も、義母と豚は喚き散らしたらしいが、義父がそれをなだめてくれたらしく、新居に移り住んで2月もすぎる頃には何の沙汰もなくなった。

もう一度、私の人生の歯車は回りだした。

しかし、同じ過ちを繰り返さないためにも、私は「独りで生きるための力、武器を持つこと」を強く感じるようになった。

そんな時目にしたのが司法試験の案内だった。

私はすぐさま教材を購入した。

「もう豚はたくさんだ。」

その思いが、私の勢いを確定させた。

こうして私の司法試験への道が始まったのだ。

「法律」という、もつとも身近でもつとも難解な武器を手にするために。

〈終〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9520b/>

司法花子伝

2010年11月16日04時41分発行